

2009年 冬号

# NEWS LETTER

発行 恵泉女学園大学キリスト教センター

第41号

## CONTENTS 目次

河井道と朝鮮	2
恵泉との出会い	3
河井道メモリアルウィーク	4
第21回ランチタイムコンサート	5
収穫感謝礼拝	5
クリスマスツリー点火式	6
クリスマス賛美礼拝	6
クリスマスチャリティーコンサート2008	7
2008年度 クリスマス献金報告	7
行事報告・行事予告・編集後記	8



(クリスマス賛美礼拝 2008.12.12)

## ◆ 河井道と朝鮮 ◆



キリスト教文化研究所 所長 李 省 展

昨年10月に本学キリスト教文化研究所の主催で、「朝鮮半島とキリスト教—南北キリスト教の現状と課題—」というテーマのシンポジウムが持たれた。平日の午後にも拘らず幸いにも百名を越える参加者に恵まれた。パネリストに尹慶老（漢城大学学長）、金興洙（牧園大学教授）、徐正敏（延世大学教授）と、この分野の第一線で活躍している三氏を韓国から迎えることができた。また森本あんり（国際基督教大学教授）と川島堅二（本学教授）の両氏がコメンテーターを務め、日韓の研究者間で活発な論議が展開された。現代に焦点を当て、また韓国と朝鮮のキリスト教を日韓の研究者が包括的に論じたこの種のシンポジウムは日本において最初であったとっていいだろう。

現在、韓国の人口の約四分の一がクリスチャンだといわれている。開港以降の上層より中下層に重点をおいた土着主義的な宣教方法により、また朝鮮の覇権をめぐる日清・日露戦争、そして日本による植民地化という一連の暴力を背景とした歴史過程も伴い、教会は求心力を増していった。ピョンヤンが「東洋のエルサレム」と称されたのもまさにこの頃であった。さらに三・一独立運動においてキリスト教は中心的な役割を果たすことにより、その発展は解放後も継承されることとなる。朝鮮戦争ではキリスト教指導者の多くが南への移動を余儀なくされた。そして分断、冷戦構造の固定化、韓国での軍事独裁と民主化闘争、高度経済成長など激動の状況下で、主に南においてキリスト教人口は飛躍的な成長を見たのであった。

広く知られてはいない事実であるが、当時YWCAの幹事であった河井道は、植民地化後の比較的早い時期に朝鮮を訪問し、『女子青年界』に訪朝時の印象が書き残されている。朝鮮を「教化」という文明主義的な観点から河井は必ずしも自由ではなかったが、彼女は「朝鮮は亡国ではない」と断言し、朝鮮キリスト教の発展に大いなる期待を寄せているのが印象的である。また関東大震災では数千人の朝鮮人が虐殺されたが、多くの知識人が沈黙を守るなか、「人類愛とは正反対のこと」をなしてしまつたと真摯な反省を披瀝している。このように時代的な制約を受けつつも、それを超える眼を持ち、朝鮮と向き合い、節々において貴重な発言を残しえた創立者の精神を、恵泉女学園は今後も継承していきたいと思う。

現在、北にも少数であるがクリスチャンがおり、ピョンヤンには教会と神学校が存在している。北朝鮮の冬は特に厳しい。その冬を乗り越えるための「愛の練炭」運動が韓国と在日大韓基督教会の女性会を中心に展開されている。千円献金すればオンドルなどで使われる練炭数十個が北に送られるとのことである。細々とした交流ではあるが、このような触れ合いこそが、凍てついた人々の心を溶かしていくのであろう。

## ◆ 恵泉との出会い ◆



キリスト教教育主任 柳下 明子

2008年9月より、産休に入られた宇野緑先生の後任で、キリスト教教育主任の任についています。私と恵泉の出会いは、おもにキリスト教の「教会」という現場においてでした。非常に開明的な女性にたびたび教会で出会い、何かの話の折に「私は恵泉の卒業生なのよ」と誇らしげに語られることが良くあり、自立した女性を輩出している学校であり、なんだか面白い教育をしているらしいところ、という印象を受けていたのです。

そのうち、縁あって大学のキリスト教センターで働かせていただくことになったのですが、予想にたがわず、恵泉女学園大学は面白い教育をしているところでありました。

はじめのうちは、長靴をはいて、麦藁帽をかぶった大勢の学生たちが、キリスト教センターの横を通ってどこに向かってゆくのか、見当もつきませんでした。一年次には園芸実習が必修科目として設定されているなどということに想像も及ばなかったからです。彼女たちはいったん長靴を脱いでジャージを着替えれば、どこからどうみても「女子大生」ですが、その瞬間は「農家の娘」そのもの。子ども時代から東京に育っているような学生であれば、生まれてはじめての農作業の経験なのかもしれません。物理的に土に触りつめに泥がつまり、汗をかいて、そして思いもかけなかった収穫を得たり、思い通りの実りが得られなかったり・・・そのような体験が「必修」として与えられている、ということとは私にとって大きな驚きでした。学園の教育理念の大きな三本の柱「聖書・園芸・国際」がこのように保持されている、ということを知り、私は早々と恵泉の教育のユニークさの洗礼を受けたのでした。私が知り合ってきた卒業生たちの気骨はここからきていたかと、納得のいくものがありました。

さて、私が主にかかわるのは、もう一つの柱、「聖書」ですが、毎日の礼拝の準備が通常の私の業務となります。その内容も着任前の私の予想を裏切るものでした。礼拝の奨励は教職員・学生の協力で成り立ち、「キリスト教教育主任」の出番はほとんどない！うれしいニュースです。さまざまな年齢や立場の人が、礼拝という場所でそれぞれの思いを分かち合う場所としてチャペルアワーが大切にされていることは、大学という場所で牧師としての働きをどのように生かしてゆくのかということを自分に問いかけつつ恵泉に来た私にとって大きな励みです。多くの方々の協力を仰いで面白い事がたくさんできそうです。

限られた立場ではありますが、それだからこそできることもたくさんあると信じます。限られた時間、神様の導きの下に働きが豊かなものになることを信じて努めてまいりたいと思います。

## 河井道メモリアルウィーク

10月13日～17日



### 恵泉でまかれた種（10月15日の礼拝に参加して）

人間環境学科1年 川畑 みどり

高校時代、自分が何をしたいのか分からず、自分が嫌いだと言っていた小澤さんが、恵泉に入ってから素直に「きれい」などと言えるようになった、という話を聞いて、これもやはり園芸の力なのだと思います。蓼科ガーデンの管理をして、なかなか自分の思うようにいかない時などに、どうしようもない力を感じるという言葉を見て、それぐらい大変で、人間が扱うことのできない力だからこそ、園芸が持つ力はすごいのだと感じました。

恵泉の良さというものは種のようなもので、今は芽を出さなくとも、環境が変われば芽を出す、という言葉が良かったです。

### 「園芸」を守る（10月17日の礼拝に参加して）

人間環境学科1年 石井 絵理香

10月17日の礼拝は、「恵泉教育の継承」という題名で恵泉女学園大学の歴史を聞きました。戦争が終わっても園芸を続けていけるかどうかという考えもありましたが、園芸を守るという意味を持ち、今こうして園芸を続けていけるのだと思います。大谷さんは礼拝で「園芸を大事に育ててほしい」とおっしゃっていました。大事に育ててほしいということは「守る」ということではないかと思っています。

園芸の授業が必須という大学は恵泉ぐらいだと思います。都市化が進み、植物を育てる環境が少なくなっているなどと思います。恵泉は、ずっと今まで植物を大事に、環境を大事にしてきたので、回りの環境が整っているのだと礼拝を聞き終わったときに思いました。今日の礼拝で、私もこれから園芸と植物と環境を大事にしていきたいです。

### 園芸の力（10月16日の多目的アワーに参加して）

人間環境学科1年 橋本 静

「園芸療法」と聞いて、漠然と「良いこと」としか分からなかったし、具体的にどのようなものかを知らなかったので、今日は凄くためになりました。前日に聞いた小澤さんの話にも出てきたように、園芸には人の心などに変化を与え、自信や自尊心を育める力があり、それを利用し、人を癒すのが園芸療法なのだと分かりました。お話を聞いていると、リハビリや認知症予防に花や植物を取り入れることにより、苦しみの中にも楽しさや動ける喜びを見出せることは素晴らしく、生きる活力になると、思いました。

私にも認知症の祖母がいるので、ベルガーデン水曜クラブのひとこまを写真で見て、このようなところに祖母を連れて行ってあげたいと思いました。花や植物を見たときの笑顔は他人を幸せにできるのではないと思うほど綺麗です。そんな笑顔を作る園芸療法は、私にとってもとても興味を抱かせるものでした。

## 第21回ランチタイムコンサート

10月9日

### 音の追いかっこ

日本語日本文化学科1年 井戸 なつみ

春学期に一度チャペルコンサートに出席し、オルガンの演奏を聴いていたので今回はどのような曲が聞けるのか楽しみだった。一曲目は、フランス人であるジャン・アダム・ギランの「第二旋法による組曲」だった。悲しみを感じさせるメロディーに始まり、途中には今までに聞いたことがない不思議な和音もあった。軽いテンポだが、オルガンの曲独特の、悲しいような、懺悔をしているような曲だった。「バスのトランペット」では、低音を「フルートによるトリオ」では、オカリナのような、どこか懐かしい感じのする音色を聴くことができた。二曲目のバッハの「前奏曲とフーガ ホ短調 BWV548」はメロディーを片方ずつ追いかっこしているのが印象的だった。演奏中は教会内の雰囲気が違うなと思った。

## 収穫感謝礼拝

11月20日

### 感謝するとは

人間環境学科1年 佐藤 桃子

この礼拝に参加するまで、私には収穫を感謝するということがどういうことなのか具体的によく分からなかった。そんな中、話を聞いていると、聖書の規定には収穫があったらそれらの一部を保存しておくことという規定があり、その取っておいた収穫物は、孤児や夫をなくしてしまった人や貧しい人に分けるためにある、そして「収穫というものは誰かに分け与えることで初めて恵まれたものになる」「誰かと何かを分け与え供することが大事だ」という言葉が今回の話でとても印象深かった。

そしてその後の、一人で食べるということはずまらないし体にも悪いことだという話に多少驚きを感じた。なぜなら、私自身が一人で食事をしていても、正直つまらないと感じたことがないからだ。しかし、この話の後に行われた「お弁当の日」に、知らない人達に交じってクイズをして他国のことを知ったり、外で大勢の人と一緒にシートに座って食事をしているときにふと、一人でする食事をつまらないと感じたことはないが、大勢で食べる食事や誰かと時間を共有する食事がいつもよりおいしいということは無意識に分かっていたんだな、ということに気づいた。そのときようやく、多くの人と食べることで収穫のありがたさや美味しさを知ることができるという言葉の意味が分かった気がした。



## クリスマスツリー点火式

11月26日

### ろうそくの光

文化学科1年 飯野 咲良

授業が終わり、日が暮れ始めた頃、時計台の近くへ多くの学生が集まりました。そして、ツリー点火式を始めました。

私たちは大きな輪になり、賛美歌を歌い、ろうそくの火を分け合いました。そして点火のメッセージを聞き、待降の祈りを捧げました。夜の闇の中で、小さくゆらめく光は、まるで私たちのようだと感じました。ろうそくの光は、決して大きいものではありませんが、暗闇の中でも周りを優しく明るく照らします。人も、一人一人の力は小さいかもしれませんが、けれども、その小さな力がともし火となって、誰かの心を明るくしたり、誰かの希望になったりするのかもしれないと思いました。



私はこの点火式で、聖歌隊の仲間と一緒に「ひいらぎかざろう」を歌いました。星がきれいに瞬く夜空に、聖歌隊のみんなで、歌声を響かせることができたことは、大切な思い出になるでしょう。ラウンジに移動し、温かなお茶とケーキをいただきました。笑顔を分かち合うことができ、寒い夜でしたが、身も心も温かさを感じることができた時間でした。

## クリスマス賛美礼拝

12月12日

### 最初で最後のクリスマス礼拝

日本語日本文化学科4年 武子 真弓

皆さんは毎日の礼拝にどのくらい参加していますか？私は、この4年間の合計でも5回程しか参加していません。「礼拝」と名のつくものには近寄りもしませんでした。クリスチャンでもない自分が、礼拝に参加するのは軽率なことのように感じていたからです。しかし、大学生活最後のクリスマス礼拝に参加して、少し後悔をしました。こんなにも感動し、楽しめるものならば、1年生の時から参加しておくべきでした。



その感動は聖歌隊の入堂から始まりました。聖歌隊の厳かな声が響き渡り、照明が落とされたチャペルに一歩ずつ静かに入ってくる隊員。その歩みとともに手に持つキャンドルが、一つまた一つと流れていく光景は美しく、すべてのキャンドルが置かれた燭台は、クリスマスツリーのように光り心の奥底まで、じんわりと温かくしてくれました。

そして、説教という形ではなく、聖書の朗読や賛美歌、ハンドベルの演奏を効果的に用いた劇などはキリスト教素人の私にも理解しやすく楽しみながら「聖なる日」を祈る気持ちにさせてくれました。

礼拝は卒論の提出後。卒論を書くにあたり、これまで色んな知識を与えてくれた先生方、諦めそうになる度に、励ましあってきた友人たち、私は様々な人々に支えられて今があるのだと実感している時だったため、心からの感謝と世界中の人が幸せであるようにと祈ることができました。

礼拝後のパーティーでは、おいしい食事を取りながら、学科・学年に関係なく様々な人と交流することができ、とても楽しいひと時でした。こんなに楽しい時間も、これが最後だと気付くと、少し残念な気持ちにもなりました。しかし、最初で最後のクリスマス礼拝は、私の大学生活の思い出に新しい光となって残っていくことでしょう。

まだ、一度も参加していない皆さん、クリスマス礼拝はもちろん、様々なイベントに足を運んでみてください。そして、皆さんが、私のような小さな後悔をすることのなく楽しい恵泉生活を過ごしてください。

初めてのクリスマスコンサート

日本語日本文化学科1年 伊藤 詩織

クリスマスコンサートに聖歌隊の一員として初めて参加しました。4月に聖歌隊に入団してから行事やサマーコンサートを通して人前で歌う経験をしてきましたが自分が想像していた以上に多くのお客様が足を運んで下さり緊張がさらに高まってしまいました。

しかし、歌い始めてからお客様一人一人の温かいまなざしで聴いてくださっている姿に嬉しく自然と笑顔になれ、ピアノやオルガンの音色と共に歌うことができました。

この日の本番を迎えるまでに昼休みを利用しての練習、金曜日の活動日で何度も歌ってきました。練習を行う中で歌うことに必死で周りの音を聴けていない自分に嫌気がさしてしまうことや英語歌詞の発音の難しさ、特に大変だったことが30人近くの声をハンドベルの高い響きに合わせ一つに調和する難しさなど様々な問題に直面しましたが、先輩の親身なアドバイスや先生のご指導もあり充実感を感じながらコンサートを終えることができました。



(リハーサル風景)

コンサートを通して多くの方とクリスマスを迎えられたことを嬉しく思いました。最後にコンサートに携わって下さった多くの方々に心から感謝いたします。

2008年度 クリスマス献金報告

皆様のご協力により、多くのクリスマス献金が集まりました。この献金が、社会の中で弱くされている人々の助けとなることを願いつつ、ここにご報告いたします。

1	クリスマス礼拝席上献金	213,165円
2	クリスマスコンサート献金	81,503円
3	クリスマスコンサートチケット収益	124,000円
4	クリスマスコンサート販売品収益	72,050円
5	クリスマスカード収益	28,050円
6	ポインセチア収益	44,000円
7	多摩フェスティバル実行委員会より	100,540円
8	多摩フェスティバル出店収益 (キリスト教センター&学生宗教部シャロン)	47,953円
9	昨年度繰越金	2,891円
	合計	714,152円

献金先内訳

1	15団体施設・団体へ	各47,000円	705,000円
2	手数料		3,190円
3	次年度繰越金		5,962円
	合計		714,152円

献金先15施設・団体名

中国四川大地震、ミャンマー (ビルマ) サイクロン被害被災者支援、全国キリスト教学校人権教育研究協議会、女性の人権サポート・くろーばー、共働学舎、アクティブ・ミュージアム 女たちの戦争と平和資料館、バーンサバイ、バット博士記念ホーム、矯風会ステップハウス、山谷兄弟の家伝道所・まりや食堂、日本聾話学校、止揚学園、深川愛隣学園、東京YWCA「留学生の母親」運動、シャプラニール活動支援

## 行事報告

- 8月1日(金)～3日(日) 学生宗教部シャロン主催 サマーキャンプ  
『恵泉のこころ』 於 恵泉女学園蓼科ガーデン
- 10月9日(木) 第21回ランチタイムオルガンコンサート  
演奏：藤森いづみ(日本基督教団霊南坂教会オルガニスト)
- 10月13日(月)～17日(金) 河井道メモリアルウィーク  
13日(月) 佐伯 幸雄(恵泉女学園中学高校校長)  
14日(火) 豊田 まりも(恵泉女学園大学卒業生、オルガニスト)  
15日(水) 小澤 文子(恵泉蓼科ガーデンスタッフ)  
16日(木) 多目的アワー 澤田 みどり(NPO法人日本園芸療法研修会代表)  
17日(金) 大谷 弘(恵泉女学園短期大学名誉教授)
- 10月25日(土) 第19回チャペルコンサート  
レクチャー&演奏 廣野嗣雄(東京藝術大学名誉教授)
- 11月8日(土)、9日(日) 多摩フェスティバル ハンドベルコンサート  
11月20日(木) 収穫感謝礼拝(多目的アワー)  
「日本とアフリカー食のつながりから見えてくるもの」  
11月26日(水) クリスマスツリー点火式
- 12月12日(金) クリスマス賛美礼拝～私たちの献げもの～・クリスマス祝会  
12月20日(土) クリスマスチャリティコンサート2008

## 行事予告

- 卒業リトリート 2月6日(金)～7日(土) 於 八王子セミナーハウス  
第20回チャペルコンサート 3月7日(土) オルガン：関本 恵美子(キリスト教音楽主任)  
ソプラノ：渡辺 玲子  
卒業礼拝 3月18日(水) 奨励：梶原 寿(日本基督教団教師)  
第24回タイ国際ワークキャンプ 3月24日(火)～4月1日(水)

## 編集後記

秋から冬にかけて多摩丘陵の自然はダイナミックに変容していく。一瞬一瞬が神の創られた芸術品であった。そして、12月12日には、薄暮の時間からクリスマス賛美礼拝が持たれた。暗闇の中から光をもたらしたイエスの降誕を祝すにふさわしく、聖歌隊、ハンドベル、聖劇すべてが心に残るものであった。これらに関わった方々、原稿を執筆された方々に心より感謝したい。

宗教委員 網野ゆき子



### NEWS LETTER 第41号

発行 恵泉女学園大学キリスト教センター  
〒206-8586 東京都多摩市南野2-10-1  
TEL 042-376-8285 FAX 042-376-8297  
印刷 電算印刷株式会社  
発行日 2009年1月19日